

豊中ロータリークラブ教育フォーラム「小・中学校の道徳の授業の特別の教科化を考える」— 速報

(2016年2月25日公開)

大阪大学名誉教授 畑田耕一、兵庫県立豊岡高等学校教諭 渋谷亘、税理士法人 ForYou 本町事務所 関谷洋子

豊中ロータリークラブ恒例の教育フォーラム、本年は外部からは市立西宮高校、大阪府立富田林高校の生徒も含めて教員・教育関係者 18 名、ロータリー会員は泉パストガバナー、当クラブの松尾会長をはじめ 19 名の参加のもと、小・中学校の道徳の授業の特別教科化の経緯、既に始められている特別教科化に向けての新しい試み、成績評価の方法、道徳の本質などについて話し合った。

これまでの道徳の授業は成績評価もされず上級学校への進学の際の資料にも入らないということもあって、小学校では授業時間が朝礼などの影響で短くなるおそれのある月曜日の 1 限目に配置されたり、内容も道徳に関係すると思われる既存の文章を生徒に読ませて感想を発表させたり、というような道徳に真摯に取り組んでいるとは思えないものが多かったようである。小・中学校の道徳の授業を「特別な教科＝道徳科」に格上げし新しい学習指導要領を作成したのは、算数・数学や国語などよりは緩やかな形の授業としながらも、各学校において指導が確実に行われる授業にしたいという文部科学省の意図と願いを込めたものである。道徳の学習は学校教育全体、すなわちすべての科目を通して行うべきものではあるが、「道徳科」は他の教科と横並びではなく道徳教育の要の役割を果たすべきものであるという意味で「特別の教科」とされた訳である。

教科書も整備されて道徳科が完全な形で発足するのは平成 31 年度からであるが、既に各学校で新しい授業の試みが始められている。「蛍池小学校では論理的思考力の養成、国際化への対応、道徳的価値観の習得と実践力の養成に重点を置きつつ、特別活動や総合的な学習での実体験を通して真の意味の人間関係の構築・学習を地域の協力も得て行っている。これにより生徒たちは高学年になるにつれて自己の長所・能力への自信を深め、子供同士の話し合いや異なる学年の児童で構成された縦割りグループによる校内清掃などを通して、自分も人の役に立つことが出来るという実感を深めつつある」とは矢木校長の話である。修身の授業は戦後 GHQ に軍国主義教育とみなされ一時停止したが、1958 年に理性ある社会人を育てる道徳の授業として復活した。今回のフォーラムの参加者の年齢は 16 歳から 89 歳にわたり、その半分以上が道徳の授業が一時停止していた間に学齢期を経た世代であった。その人たちからは、年間 35 回も道徳について考える機会を与えられていることの幸せをかみしめて欲しいという意見もあったことを伝えておきたい。

教科化にともなう成績評価については新しい指導要領に「生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」と記されている。この道徳科の成績評価については、AO 入試や就職試験の採否を決める重要な要因になってしまう可能性を危惧する声も含めて、多くの提案と活発な議論が行われた。これらは、「個々の生徒に道徳的長所や努力目標を具体的に示すことによる評価と理解できる文科省の提案が妥当である」「評価の文章に教員の主観が入るような表現は極力避け、校内清掃を誠実に継続的に行った、というような事実記載に重点を置く」「自分が戦争中に小学生として経験したように、他の全ての教科の平均点を考慮して数値評価をする。これは道徳の学習は学校教育全

体、すなわちすべての科目を通して行うべきものである、という道徳科の趣旨から考えても妥当である」「個人評価はするべきではない。クラス全体としての学習状況や道徳性に係る成長の成果を教員・生徒で議論し結果を公表して爾後の各人のさらなる成長の糧とする」「授業による学習成果と道徳的成長を生徒に自己申告させ、それを成績評価に代える」「生徒の自己申告を参考にして教員が評価をする」「自己評価を、それを希望する生徒にはクラスで発表させて生徒全員の道徳的向上に資する。この際に生徒が自己の心の中とは違うことを言うようなことが起こらないための配慮が必要である」などである。当面は、学習指導要領にしたがって、長所や努力目標を簡潔な文章で生徒に伝える形式の評価が行われることになると思われるが、授業の成績評価は、本来、生徒の学習効果向上の支援を目標とするべきものである。道徳科の評価は生徒の人間評価に繋がるともいえるものだけに、どのような方法・形式によるのが最も適切かを教員・生徒が一緒になって考慮していくべきものであろう。

道徳とは何か、についてもかなりの議論を重ねた。学習指導要領には、道徳の目標は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」であるとしたうえで、その内容は、**A**.主として自分自身に関すること、**B**.主として人との関わりに関すること、**C**.主として集団や社会との関わりに関すること、**D**.主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること、の四つに分類して説明されている。**A**には、自主・自律・自由と責任、節度・節制、向上心・個性の伸長、希望と勇気・克己と強い意志、真理の探究・創造が含まれていて、自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつことから、真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めることにいたる、自分自身に関する道徳的に重要な項目が説明されている。**B**には、思いやり・感謝、礼儀、友情・信頼、相互理解・寛容が、また、**C**には、遵法精神・公德心、公正・公平・社会正義、社会参画・公共の精神、勤労、家族愛・家庭生活の充実、よりよい学校生活・集団生活の充実、郷土の伝統と文化の尊重・郷土を愛する態度、我が国の伝統と文化の尊重・国を愛する態度、国際理解・国際貢献、が述べられている。**B**では、他の人と交わる時の礼儀・友情・信頼に基づくコミュニケーションを通して他に学び自らを高めていくことの重要性が、また、**C**では、法ときまりを守り、自分の行いが公正・公平かどうかを常に自問自答しつつ勤労に励んで社会に貢献し、それを通して家族、学校、郷土、国と人々を愛して世界の平和と人類の福祉に繋ぐことの重要性が強調されている。そして、**D**には、生命の尊さ、自然愛護、感動・畏敬の念、よりよく生きる喜び、が述べられている。これは、人間を温かく、時には厳しい態度で包んでいる動植物を含む自然との想像力を駆使したコミュニケーションを通して、人の及ばない力を持つ自然の偉大さといのちの尊さの理解を求めるものと筆者は考えている。この学習指導要領の文章は、実に上手にしかも詳細に道徳の内容を包括的に記載していると思う。「ここには西洋的道徳 (**A**、**B**、**C**) と東洋的道徳 (**B**、**C**、**D**) が巧みにまとめられている。道徳は英語では *moral* というが、**A**には *ethics* (= rules or standards governing the conduct of a person) のギリシャ語語源であるエートスが反映されているようにみえる。また、**D**には老子の考えも反映されている」とは京都大学特別研究員で哲学者の服部氏の言である。

このような詳細で包括的な道徳についての議論とともに、参加者個人の道徳観についても話し合った。義務教育を終えたばかりの高校生は、自身の受けてきた道徳の授業を振り返りつつ、道徳で学ぶべきはモラルやマナーであり、それは自身で体験して初めて学べるものであると指摘し、授業中の道徳についての意見交換の重要性を強調した。この発言が切っ掛けになって、いろいろな意見が出た。「自分以外の人に対する尊敬と感謝の念を抱き、それを言葉で表せることが道徳の目指すところである」「生徒が先生に感謝の念を抱かなければ道徳を含むあらゆる教育は成り立たない」「しかし先生が自ら『自分に感謝せよ』とは言いにくい。以前は家庭がその役割を担ってきたが、価値観が多様化し、学校のルールと家庭のルールが最近では大きくずれている場合があり、学校と家庭の連携が調整にいかない場合も増えてきている。保護者と学校がもっと議論することが必要である」などである。「教育基本法には教育勅語の精神が継承されており、そこには教育の目標として『人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成』が謳われていることを日本国民は深く認識しておかねばならない」という意見もあった。

「道徳とは人の進むべき道であり、進むべき倫理を示すものである。今日の議論は道徳というより人間教育に関するものが多い」とは、参加者中の最長老で、元豊中市市民病院院長でロータリアンでもある木村氏の言である。道徳とは人の道であり、人の心の道である、という点に関しては、出席者の多くが共感したところである。国際ロータリー2660地区の元ガバナー泉氏は、ロータリーの基本は職業を通しての奉仕すなわち職業を通して社会のニーズを満たすことであり、その根底を支えているのは道徳的なものの考え方であるが、最近この職業倫理・道徳に欠ける企業があるのが憂慮される、と述べたうえで、ロータリーの四つのテスト（1. 真実かどうか 2. みんなに公平か 3. 好意と友情を深めるか 4. みんなのためになるかどうか 言行はこれに照らしてから行いべし）を紹介した。この四つのテストは自己の社会での行いが道徳的か否かを自己評価するときの判断基準として極めて適切なものであると思われる。大阪大学国際交流センターの卓氏の「私が学生時代に韓国で学んだ道徳は、人間として如何に生きるかを考える日本の道徳とは違って、如何にして北朝鮮と共産主義から国を守るかを考えさせるものであった」という発言は、日本の戦争中の教育を思い起こさせるものである。彼女は、また「韓国からの留学生で日本に3年も滞在しながら日本人の友達がほとんどできなかったという学生がかなりいる」とも話した。これは、韓国の学生の日本の学生と友達になりたいというニーズが満たされていないということで、学習指導要領のBが大学内で適切に機能していないことを示している。解決への努力が望まれる。

道徳とは何かという問いに簡潔・明快に答えることは、上記の意見でも分かるように、意外に難しい。「道徳的能力」という語を用いると、説明し易くなる。「道徳的能力とは、人が自己および他（人だけでなく動・植物、自然をも含む）に対してどのように振る舞うのが良いかを、それまでに得た知識を基にして考えて判断し、それを意欲をもって実行する能力である。したがって、道徳的能力の根本の力は想像力である。自分が道徳的に判断して実行した結果を、想像力を働かせて詳しく観察し考察することにより、道徳的能力はさらに高められる」とは筆者畑田の手短で分かり易いつもりの説明である。

会の終りに、泉ガバナーから昨年同様楽しく話のできるフォーラムであったことと、道徳の授業は学校・地域・家庭が一体となって実施されるのが望ましい旨のお言葉をいただいた。ただ、地域・家庭、特に家庭の協力

は最近かなり得難くなっている。子供が家で両親を含めて家族と食事をしながら道徳の授業の話をするような機会が非常に少なくなっている。両親とも勤めていて帰宅が遅く、子供も塾通いに忙しくて、家族が揃って食卓に着く機会は殆ど無いという。来年のフォーラムでは道徳の問題をもっと広く、そして深く議論したいと思いつつ、4時間にわたるフォーラムの幕を閉じた。

フォーラム出席者（順不同・敬称略）

市立西宮高等学校 岡本博教諭と1年生生徒4名（松山太郎、中井帆乃香、西澤柚香、秋山みき）、大阪府立富田林高等学校 小川力也・富永悠両教諭と1年生生徒2名（刀禰友里恵、桶土井直人）、蛭池小学校校長 矢木克典、大阪大学理学研究科国際交流センター 卓妍秀、大阪市水道局 北本靖子、元大阪大学技術職員 矢野富美子、日本学術振興会特別研究員 服部敬弘、元四天王寺学園教諭 尾野光男、国際ロータリー2660 地区パストガバナー 泉博朗、高知工業大学 名誉教授 細川隆弘、(株)コンセプト 久保田拓鑑、兵庫県立豊岡高等学校教諭 渋谷亘、豊中ロータリークラブ会員（松尾宗好、北村公一、昌尾一弘、木村正治、澤木政光、篠原厚、宮田幹二、戸部義人、松山辰男、大塚頼三、丹羽権平、村司辰朗、米田真、真下節、榎田定子、小川佳伸、関谷洋子、畑田耕一（司会））